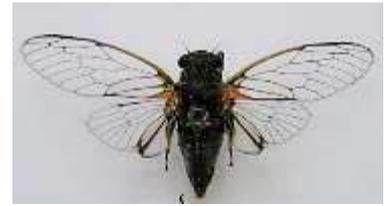


# 掲 示 板

2019 年度 第 1 号 通巻 95 号 2019 年 6 月 15 日発行



クマゼミ

はじめまして

フィールドレポーター担当学芸員 松岡 由子

今年も、心地よい季節から梅雨を迎える時期となりましたね。フィールドレポーターの皆様、はじめまして。今年度、フィールドレポーターの担当をさせていただくことになりました、学芸員の松岡です。水生動物学が専門です。一年間どうぞよろしくお願いいたします。

フィールドレポーターの活躍は、これまでも聞いていて、楽しそうだなあと興味はありましたが、実際のスタッフ活動を見るのは初めて。緊張と期待も膨らむ中で、交流室の扉を開けました。

皆様のお手元に届いていると思いますが、今年の「夏のセミの調査」がいよいよ始まります！

資料作成にも初めて携わりました。アンケート調査には、それぞれの分野に精通する学芸員が、必ず関わっています。アンケートってこうやって作るのか…集計や評価の仕方まで考えながら、資料を作成していく調査担当学芸員と、スタッフ達の様子にただただ感心するばかり。スタッフは、皆さんと同じフィールドレポーターの有志の方々に、フィールドレポーター活動の取りまとめを行って来ています。その姿は真剣そのもの。とても熱心で楽しそうに活動しておられます。

先月には、調査報告を兼ねた交流会が開催されました。詳細は次ページから報告がありますが、小さなお子様から、ベテランフィールドレポーターまで、総勢 35 名の方々にご参加いただき、大変楽しい会になりました。毎年、資料を見ながら調査して下さる皆さんは、滋賀県の自然や環境に、どんどん詳しくなっているのでしょうか。私も少しずつ学んでいきたいと思っています。

スタッフの定例会は、月に 2 度、第 1・第 3 土曜日に、博物館交流室で行っています。皆様も覗きに来ませんか？フィールドレポーター初心者の私もお待ちしております。

☒ ☒ . . . ☞ ☞ ☞ ☞ . . . . . も く じ . . . . . ☞ ☞ ☞ ☞ . . . ☒ ☒

|   |                      |          |    |   |                        |       |     |
|---|----------------------|----------|----|---|------------------------|-------|-----|
|   | はじめまして               | 松岡由子     | P1 | 3 | 橋の名前を調べましょう調査よもやま話 (2) | 井上修一  | P10 |
| 1 | フィールドレポーター交流会の報告     | FRスタッフ一同 | P2 | 4 | タンポポとおつきあい             | 近江心気郎 | P12 |
|   |                      |          |    | 5 | アキアカネ活動計画案内            | 椋島昭紘  | P13 |
| 2 | 琵琶湖博物館でも見られる不思議ないきもの | 大槻達郎     | P9 | 6 | FR 活動・報告・予定            | 編集局   | P14 |

# 1. フィールドレポーター交流会の報告

フィールドレポーター  
スタッフ一同

## ① 始まり

令和元年5月18日(土)生活実験工房で交流会が開催されました。

今年からフィールドレポーター担当になられた松岡学芸員が進行役です。まずは、琵琶湖博物館交流担当八尋学芸員の挨拶から始まりました。

調査発表が3題と多く時間の配分が若干危ぶまれましたが、発表スタッフはベテラン揃いです。時間をかけ十分に検討されたものに違いありません。内容は深く高度ですが、ポイントを外さず、わかりやすい説明はさすがです。全体としてスムーズな進行でした。

個々の発表内容、意見や質問は発表ごとに紹介していきます。

準備段階で役割分担を決めた際、従来の写真班に加え今年は音声班も設けました。毎回、質問回答がたくさん出てきますがスタッフの記憶だけでは抜け落ちが多く、もったいないという反省がありました。大切なコメントは残しましょうということの実践です。貴重な時間を割いて来ていただいた方たちの声は貴重です。うまく構成できたら幸いです。

懇談会の中身の録音までとれませんでした。家族参加の方達には出来るだけインタビューをして、生の声を聞かせてもらいました。会の雰囲気がフィールドレポーターの皆さんに無事伝わることを願っています。

### 交流会報告の担当

写真：津田國史

録音：井上修一

文：中野敬二

## ② 「橋の名前を調べましょう」調査報告 報告者：スタッフ

橋の調査をしようとしたのは、こんな投稿があった事から始まりました。

『橋の起点側が平仮名、外界側が漢字で表記されており、幼少時に故郷を離れて、世間で苦労を重ねて読み書きを覚えて帰ってくる時には漢字が読める』(原文を抜粋)

さて調査では、

投稿内容を裏付ける結果にはなりませんでしたが、漢字・ひらがななど表記の位置にそれなりの



規則があるのではなかろうかと思われる集計結果になりました。

また、川を主体に橋を見る場合と、道を主体に橋を見る場合では、表記の位置に多少の違いは見られたという結果も出ました。橋を管理する機関（国・県・市など）の中には、表記位置に法則性があるように見えた機関もありました。

名前の不明な橋については、古い地名との関連があるかもしれないので、調べればさらに奥の深い調査になりそうです。

{詳細 フィールドレポーターだより (50号)}

【調査時の担当学芸員北井さんのコメント】

橋を構造物として見てきたので、名前の由来、橋を起点、終点に注目したレポーターの視点は面白いと思った。名前の付け方に規定のある県もあるが、滋賀県はない。そんな中で全県にわたって調べたのは珍しいことなのです。

新しく橋の名前を付ける場合は、どうしても地元の意見要望を取り入れるケースが多く公募されたり地元高校で考えたりするケースも報告されています。

### ③ 「オオキンケイギクを調べよう」調査報告 報告者：花島昭紘

2006年に特定外来生物に指定されたオオキンケイギクをレポーターが調査すると、どのような結果となるのでしょうか。分布の状態、生育環境、などスタンダードな質問に加え花の好き嫌いなどにも言及します。分布は全県に及んでおり、開花時期さえ逃さなければ誰でも観察できる環境域が広く、河川土手、道路沿いに帯状に長く生育する様子の報告が特に注目されました。

交流の場では、「ここまで広まったのは、花のタネが飛び、道路や河川で根付いたのでしょうか」という話がでました。河川はオオキンケイギクにとっては絶好の繁殖環境であったといえそう。問題提起の中で、増殖していると答えた人がいる反面、減少しつつあると答える人もあり、調査した場所によって違うのではないかという話もでました。

{詳細 フィールドレポーターだより (51号)}

報告後の質疑で、重要であり興味のあるものが出てきました。この質問に対して、県庁の自然環境保全課を兼務されている中井学芸員が適切に現実的に回答してくださいました。

質問(Q)に対する回答(A=中井学芸員)で書き出してみます。



(Q) 除草は本当に効果があるのですか。

(A) 除草のタイミングが難しいです。

種がとび散る前の時期に花を刈るのは、種による繁殖を抑制する効果はありますが、根っこによる増殖力はもっと強いので、エリアの拡大は抑えられても根絶は難しいでしょう。

(Q) すごく繁茂していた河川だったのに、今回調査で少なくなっているところもある。よく調べてみたら減らせるための何かヒントが出てくるのでは無いか。

(A) 増えたのか減ったのかは観察時期が関係します。除草された後の調査というケースかもしれませんが、減っている具体的な場所の報告もあり突っ込んだ調査の必要はあります。

(Q) 特定外来種とは？

(A) 採(取)ったり増やしたりしてはいけないもので罰金も科せられる。

しかし、元々人のために取り入れられてきました。ブラックバスやブルーギルはフィッシング用、アライグマは明らかに愛玩用、オオキンケイギクはその繁殖力と強靱さが緑化に適するとして導入されたものです。いずれもその副作用に気付くのが遅く、民間から公的な場に広がり問題となり行政の対応に注目されているものである。

(Q) 再度の質問：「駆除出来るのか」

(A) 攪乱環境の中で増加する植物だから、手をかけないという選択肢もある。種が飛び散ってエリアを大きくするケースが少ないのが救い。帯状に広がるという統計が示すように、車両について拡散するからか、道路沿いには長く広がっている。種を作る前のタイミングを見つけた除草方法の検討が課題かなと思います。

#### ④ 「集まれ！モミジ（カエデ）の仲間たち」調査報告 報告者：前田雅子

この調査は、古くから日本人に好まれているモミジ（カエデ）の仲間たち探しです。目的は大きく2つ。1つは、どんな種類の樹がどこに分布しているのか、また、どの種類がどこに植えられているのか。2つめは、いまでもモミジを愛でる風習が続いているのかどうかです。分布調べの「調査票1」と、モミジをきれいだなあと思ってみる時期や楽しみ方などを述べてもらう「調査票2」の2部構成でした。

モミジは身近な木ですが、カエデの仲間は種類が多いので、取り組みが難しかったと思われましたが、沢山の調査票が集まりました。

種の同定（種名の決定）は博物館にお願いしました。

調査に参加して下さったのは25名。この内、カエデの観察には22名、モミジに対する意識調査は21名の参加でした。



ウリハダカエデ



{詳細 フィールドレポーターだより（52号）をご覧ください  
6月中に発行予定}

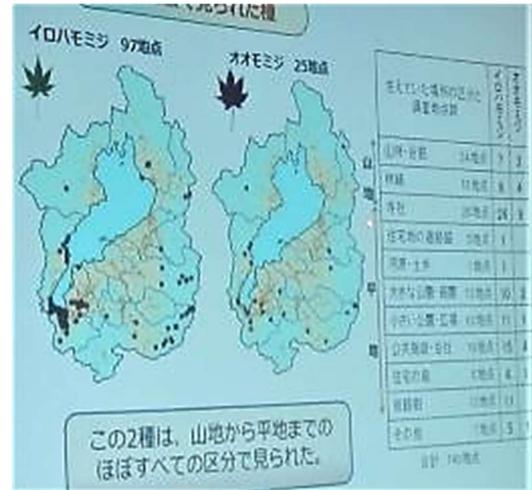
## 調査票 1 からの報告

山地と平地では、種類によって分布に違いがあるようです。

報告された場所は、全体のおよそ 1/3 が山地、2/3 が平地で調べられたことになりました。

集約されたカエデの種類はイロハモミジが県内各所に広く分布しているのが分かり、次にオオモミジ、と続きました。

これらのカエデが、自然に生えたものか（自生）、人の手によって植えられたものか（植栽）についてまとめてみると、山地では自生と判断されたものが多いのに対して、平地では植栽と判断されたものが多いことが分かりました。



今回調査では“共出現”という専門用語が出てきました。共出現とは、複数の種が一緒に見られることを意味します。同じ場所で周囲に別のモミジ（カエデ）が生えているか、そしてどれくらいの数が生えているか、複数種生えている時、樹木の種類は何か、と追及していきます。共出現については興味深い結果となりました。

モミジ（カエデ）が単独で生えている場所もありますが、複数種の樹が見られる場所が沢山ありました。複数種が見られる場所は 33 地点で、多いところは 5 種類も見つかっています。

結果、山地では違う種の樹の組み合わせが多く見られ、イロハモミジとの組み合わせが約半分ありました。対して、平地では、必ずイロハモミジが入っており、組み合わせの主役となっていました。

さて、この共出現を更に細かく検討したものが「レポーターだより」で記載されています。イロハモミジの活躍するさまを、眼を通して実感して頂きたいと思います。

## 調査票 2 からの報告

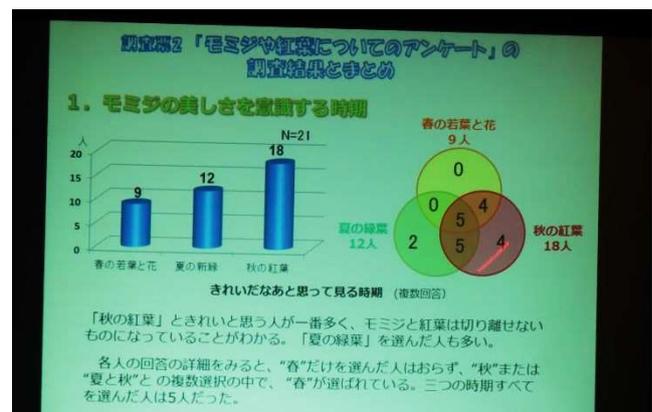
○「モミジを見てきれいだなと思う時期は？」と聞きました。

複数回答でしたのできれいと感じる時期に組み合わせがあり、おもしろい集計になったと思います。

○紅葉の興味関心と楽しみ方

大多数が何かしらの興味を持って鑑賞されています。とても関心があると答えた人は、目的地を決め遠くまで出かけ、ある程度関心があるという人は近場で楽しむと答えた方が多いようです。どちらの場合もそれぞれ目的、メニューを決めて楽しんで居られるようです。

○最後に紅葉鑑賞のおすすめスポットです。



他県の推薦も多い中で、滋賀県では日吉大社と永源寺を挙げる方が複数いらっしゃいました。他の寺社も、紅葉で有名な場所が数多く上がりました。

最後に自由討論です。ヤマモミジについてこんなやりとりがありましたので、ご紹介します。

#### 質問・感想

(Q) 山にあるイロハモミジはヤマモミジ  
が変化したものではないですか？

(A) それは考えにくいですね

(Q) 種が飛んで山に上がると考えられ  
ませんか？

(A) モミジの種はあんまり飛びません。  
くるくと回って下に落ちるとき、  
風で飛ばされる程度でしょう

(Q) 滋賀県は、山岳信仰が盛んなところだ  
から元々山上で植えられたものが時を経て山を下った。寺院が里に移った後、樹は山手に残った。  
そんな感じかもしれません。

{感想}

旅人の為に、山手の古道から少し分け入ってわざわざ植えた名残も考えられます。



## ⑤ セミ調査の勉強会

説明：柘島昭紘

プログラムでは「フィールドでの観察」となっていますが、セミの観察にはまだ時期が早かったため、会場にセミの標本や抜け殻を樹脂封入加工したサンプルを用意し、細部まで観察できる拡大鏡も準備しました。

2004、2005年にクマゼミに焦点を当てた突っ込んだ調査がされています。今回は、以前の調査方法はとらず、抜け殻を調べる事を中心にしようとスタッフで協議しました。理由として、抜け殻は動かないし誰でも見つけて回収できること、更に、付近の様子や木々の種類と実際鳴いているセミの鳴き声を報告してもらえば、セミの種類とその生息環境がはっきり見えてくるのではないかと考えたからです。もちろん、前回から14年ぶりの今回は、セミの調査から、その後の環境の変化を確認するという意味合いもあります。

説明に入ると同時に場内にはセミの鳴き声が流れ、一足早く夏の雰囲気が出て演出効果は十分、とても和やかな雰囲気となりました。子供さん連れの参加者を含め、思い思いに立ち上がり、前回調査で作成されたセミの名前当てクイズ、鳴き声当てクイズで楽しみ、屋内ではありますが、ちょっとしたバーチャルフィールド体験会になりました。



## 「夏のセミの調査」の案内

2019年度第1回のフィールドレポーター調査は夏のセミの調査です。皆さんの身近なところで見つけたセミの成虫や鳴き声、抜け殻を調べていただき、セミの種類と環境との関係について考えてみたいと思います。県内で良く見つかる、ニイニイゼミ、クマゼミ、ヒグラシ、アブラゼミ、ツクツクボウシ、ミンミンゼミ等を探して調査してください。

調査期間 6月末～9月30日です。

フィールドレポーターの皆さんには  
6月15日 調査案内、調査票を発送します。  
博物館HPからもご覧いただけます。  
多くの人の参加を期待しております。



交流会パワーポイント資料  
から抜粋しました  
調査案内に記載されています

セミカレンダー

| 6月             |   |      | 7月               |             |   | 8月 |   |   | 9月 |   |   | 10月 |   |   |  |
|----------------|---|------|------------------|-------------|---|----|---|---|----|---|---|-----|---|---|--|
| 上              | 中 | 下    | 上                | 中           | 下 | 上  | 中 | 下 | 上  | 中 | 下 | 上   | 中 | 下 |  |
| ニイニイゼミ         |   |      | チー               |             |   |    |   |   |    |   |   |     |   |   |  |
| クマゼミ           |   | ヒグラシ |                  | シャア シャア シャア |   |    |   |   |    |   |   |     |   |   |  |
| アブラゼミ          |   |      | カナ カナ カナ         |             |   |    |   |   |    |   |   |     |   |   |  |
| ツクツクボウシ        |   |      | ジー、ジリ ジリ ジリ      |             |   |    |   |   |    |   |   |     |   |   |  |
| ミンミンゼミ         |   |      | ツクツクオーシ・・・ツクリョーシ |             |   |    |   |   |    |   |   |     |   |   |  |
| ミン、ミン ミン ミン ミー |   |      |                  |             |   |    |   |   |    |   |   |     |   |   |  |

参考文献：宮武頼夫(1992)『セミのおきみやげ』福音館書店  
林正美(1984)『セミの生活を調べよう』さえら書房  
石井実ほか編(1996)『日本動物大百科 8 昆虫 I』日高敏隆監修，平凡社

## ⑥ 交流会（懇親会）

調査の発表が始まる段階では参加者の出足がやや遅く、少し堅い雰囲気のところもありましたが、その後徐々に集客数が上がり、セミの体験学習になる頃には、家族連れの方々の参加もぐんと増え、交流会の参加総数 35 名となりました。

お茶とお菓子のコーナーを囲んで博物館活動の事を質問するグループや、いすに座って「あそこまで行って調べた」「こんな処に、こんな事があった」と各人調査の苦労話が交わされて交流会本来の姿が会場のあちこちで見られました。



会場入り口に設営された FRS 前田さん採取のカエデ類の標本は素晴らしく、専門書のページをめくって見るより実物を見る方が遙かに学習効果があることを実感出来ました。葉の形と翼果の大きさ、質感を十分に体験出来たと思います。

(感想)

- こんな葉っぱみたいなものがモミジなんですね。
- 高島のどこかの山で見たことある。
- よくここまで集められたもんや。
- 町中では見られんものが多いです。

セミのコーナーには専門家顔負けの小学生とお父さんが参加されていました。レポーターになって頂けるようにしっかり勧誘させて頂く場面もありました。

セミコーナーでの父子の会話  
(守山市在住)

お父さん：この頃クマゼミが少のうなった  
子供：ミンミンゼミもあんまりで鳴かへん  
お父さん：住宅が増えたからなー  
子供：夏の宿題にしようかな



スタッフより一言

こんな有り難い言葉を今まで聞いたことが無い  
今年のセミ調査 視界良好

<フィールドレポーター交流会の報告>おわり

## 2. 琵琶湖博物館でも見られる不思議ないきもの

大槻 達郎

2019年のゴールデンウィークは10連休となりましたが、皆さんはどのように過ごしましたか。私は、研究のために九州に出張した以外の時間を博物館で過ごしました。この時期の博物館には、県内外からたくさんの方が来館します。私はおとなのディスカバリーで季節の植物を中心に展示の入れ替えをしていますが、ゴールデンウィークには何か変わったものを展示したいと考えていました。この時期に見られて、かつ、インパクトのあるもの。当館には植物の専門家をはじめ、様々な分野の専門家がいますので、いろいろな人に季節のいきものについて聞いて回ったのですが、一番インパクトのあるいきものを紹介してくれたのは、植物標本の資料整理をしている石田さんです。それは「オオセミタケ」でした。皆さんは見たことがありますか？セミの体から生えている不思議なキノコ。冬虫夏草とよばれるキノコの仲間です。中国ではこのキノコを食材として使うこともあるようです。

オオセミタケはアブラゼミの幼虫に寄生するのですが、これが当館の太古の森に生えていると教えてくれました。オオセミタケの地上部をみるとキノコなのですが、いきものをよく知っている人が見ると、地中にセミの亡骸があることが分かるのです。早速オオセミタケを掘りに行きました。その途中で滋賀県立大学の先生で、一緒に植物調査に行く先生のご家族に会いました。せっかくだからということで、我々と家族の皆さんと一緒にオオセミタケを掘りました。

オオセミタケの柄は細いので、セミが見つかるまでは丁寧に地面を掘り進めていきました。掘り進めること10cm。ちゃんとアブラゼミの幼虫の亡骸を確認できました。ここからが大変。柄が折れてしまったら、展示物のインパクトが半減してしまう…。日頃大雑把な私もこの日だけは細心の注意を払い、柄を折らないように慎重に掘り進めました。15分くらい掘っていたでしょうか、セミの周りの土をきれいに取り除くことができました。地面を掘って“宝物”を探す行為は、歳をとってからもワクワクします。オオセミタケを地面から取り上げた時、私の心は少年に戻っていました。一緒に掘ってくれた先生のお子さんも一緒に喜んでくれました。急いでキャプションを作り、その日のうちに展示しました。キャプションは先生のお子さんが一生懸命貼ってくれました。5月いっぱい展示していたオオセミタケは石田さんと先生のお子さんと私のコラボレーション展示となりました。



オオセミタケの全貌

キノコの部分が地上に見えていた。一番下がアブラゼミの亡骸

現在は当館にも生えている「コモチマンネングサ」を展示しています。これもなかなか面白い植物です。ぜひ博物館へ見に来てください。



コモチマンネングサ

この花は種ができないようですが、葉の付け根に水に浮くことのできるムカゴがついています。琵琶湖周辺ではヨシ帯で見られるので、水の流れに乗って移動しているのかもしれませんが。

### 3「橋の名前を調べましょう」調査 よもやま話（その2）

FRS： 井上修一

掲示板第94号では「念仏橋」と「竣工年」についてのよもやま話を掲載しました。今回は「ユニークな親柱」について調べてみました。親柱は橋の名前、川の名前、竣工年が刻まれた「橋の表札」とも言うべきものです。そのデザインはシンプルな直方体形状が最も多く見られますが、中にはその地域の町名、歴史、行事などを表すオブジェとして、橋の景観を主張するデザインのものがあります。ところが、それらのデザインが決定された由来や意図については不明なものがほとんどです。橋が建設される時点では行政や地域住民の強い思いでデザインが決められても時間の経過とともに忘れられているのではないのでしょうか。今回は印象的な親柱について外観や周辺情報から推理してみました。

#### （1）くにとも橋

場所：長浜市国友町 県道510号線 姉川にかかる橋（国友鉄砲の里資料館から北東へ600m）  
花びらのような輪郭で中心部に丸い凹み。中心部に何かが埋め込まれていたが経年変化で剥がれ落ちたのでしょうか？橋名板には「くにとも」、「鉄砲の里」と記述されています。



何度も眺めるうちに火縄銃の銃口を正面から見たものだと気がきました。八角形の外筒を持つ銃身は「国友筒」と呼ばれ、上部には「先目当」という照準用の突起があります。

#### （2）月観橋

場所：米原市曲谷地区 県道40号線 姉川を超える高架（姉川ダムサイトから南200m）

「月観」という名前から満月を模した円形の親柱とされたことは間違いのないと考えます。

よほどの名月が鑑賞できる場所なのでしょう。橋の欄干から里を眺望すると、左手は伊吹山地、右手は浅井地区の裏山である七尾山に連なる山地に挟まれたV字谷が見えます。V字の谷が真南になります。橋の標高は約380mもあるので谷に浮かぶ満月を堪能できそう



です。ちなみに2019年の中秋の名月は9月13日で、満月が谷の中央に浮かぶのは午後11時頃です。この橋自体は大きなカーブを描いており歩道や外灯照明もありません。夜間に橋上に駐車することは危険です。観月の際はくれぐれもご注意ください。

### (3) 野村橋

場所：長浜市野村町 国道365号線 姉川にかかる橋（姉川古戦場の西隣）

最初は、このデザインが意味するものが分かりませんでした。①親柱の下から1/3の高さの所に鉄砲で敵を打つ「狭間」に似た三角穴がある②すぐ横に姉川の古戦場がある。この二点から戦場で鉄砲弾除けや弓矢除けに使用される「矢盾」をデザインしたものと考えます。上部に描かれた平行線も矢盾に見られる「二引両紋」とそっくりです。しかし下部に描かれた「三日月紋」のような模様



については正体がわかりませんでした。姉川合戦に参加した浅井方家来の「野村直隆」の家紋では？と疑い調べましたがわかりませんでした。合戦の屏風絵に描かれた旗も調べましたが該当するものは有りません。この件は宿題として引き続き調査します。

### (4) 小津大橋、 欲賀大橋、 都賀山中の島大橋

場所：守山市 小津地区 県道26号線 新守山川に連なって架かる三つの橋



小津大橋の親柱に描かれた中央の「三つ巴文」はすぐ近くの小津神社の文であることがわかりました。小津神社では、毎年5月5日の例祭で奉納される踊りで国の無形民俗文化財に指定されている「長刀踊り」というものがあります。親柱には三つ巴文を二本の長刀が囲む図案で地域のシンボルとされたようです。

小津大橋のすぐ上流の欲賀大橋と都賀山中の島大橋では親柱に小石で描かれたモザイク画があります。長刀踊りで踊る子どもの姿が描かれています。



今回は4カ所の親柱について調べました。この他にもまだ意味が謎のものがありますが継続して調べ報告したいと思っています。

(写真撮影：筆者)

## 4. タンポポとのおつきあい

投稿：FR（文、写真）近江心気郎

私が初めてタンポポに関わったのは平成27年です。この頃、タンポポ戦争という言葉が世間に流れていました。外来種のタンポポが攻め込んできて、日本の在来種を攻撃している。このままでは在来種は絶滅するかもしれない、という情報であったように思います。

これを真に受け、由々しき事態であるから何とかせにゃならん、と感じていた矢先に「タンポポ調査・西日本2015」の活動を知り、琵琶湖博物館のフィールドレポーター調査「たんぽぽ調査」に参加することになりました。

調査を始めてすぐに気付きました。

身の回りのことだから、自然界をそこそこ知っているつもりが、全然違うということを感じ知らされました。自分の目で見て、歩いてみると自然の姿は別物でした。うまい言葉で表現出来ませんが、自然界の動植物たちは皆苦労しています。結構えげつない生き



方しているものもありますが、己の与えられた環境の中で何とかうまく生きていこうとし、土地と空間、光、水、温度なんかを効率よく利用して、生命を維持するための営みをしています。とはいえ、調査活動の原点が外来種に対する“恨み辛み”であり、動機のねじれは十分に自覚していません。謙虚な精神でタンポポを見られないのです。実際、普段生活している生活空間である住居の周りや、路上、歩道で見かけるのは外来種ばかりじゃありませんか。看過出来ません。

しかしです、いつも散歩している山手や公園、学校や芝生のあるところ、道路から少し離れた草むら、土手、よく目を凝らして見てみると思っていた以上に在来種がみつかりました。大津市内ですと、多くはカンサイタンポポです。外来種は人の目に付く場所で大体は一匹狼で、生活圏を主張しているように見えます。それに比べ、在来種は人間の生活圏からつかず離れずの場所で、塊をつくって生存域を確保している様に見えました。かなり大きなエリアに広がっている姿を見つけると何故か「日本チャチャチャ」なんて心の中で拍手したこともありました。



市街地の狭いエリアの限定調査であっても、観察が5年目になると、何となく変化していると思えるようになりました。主たる観察点を、浜大津から瀬田唐橋まで 約5kmの湖岸線と湖岸緑地に設定したのは、当初とても花数が多かったからです。2年目も同じでした。ところが、ここ3年花数が少なく花径も小さくなっている気がします。湖岸を離れて市街地にはいっていくとあまり大きな変化は感じられません。

この原因を考えてみたいと、観察記録を表にしてみました。

| 観察年   | 2～5月の天候  | 活動の内容        | 活動のまとめ・感想          |
|-------|----------|--------------|--------------------|
| 平成27年 | 平年並み     | フィールドレポーター調査 | 思った以上に色々見つかった      |
| 平成28年 | 平年並み     | 在来種探し        | 在来種が広く分布している       |
| 平成29年 | 気温低く、寒い  | 在来種探し        | 寒すぎて、まとまった花の観察できない |
| 平成30年 | 雨と風強い、寒い | 在来種探し        | 在来/外来、割合算出の試み      |
| 令和元年  | 暑さ寒さが極端  | 調査メッシュを多くする  | 湖岸線のエリアを倍にする       |

・・・天候は筆者の感覚です・・・

特徴的なのは3年前の大寒波です。5月になっても寒く、花のサンプリングが十分に出来なかった事もあり、レポートが作れませんでした。この影響を引きずるように昨年は湖岸線の花数が一気に少なくなりました。今年は一転高温ですので花数が増加するかと思っていましたら昨年と同じです。湖岸調査域を北は唐崎から南は南郷洗堰・大石まで約10kmを見て回りましたが少ないと言う印象しか残りませんでした。これに比べて湖岸線を離れると花影は一気に増加します。在来種も外来種もそれぞれ自分たちのエリアを守って花をつけていました。湖岸線だけ特別花影の少ない理由がわかりません。



ススキの中にも（膳所御用池）

原因は全く想定出来ませんが、ここ数年の湖岸の風の強さが気になります。雨、寒気、プラス風が要因なのかと思えてなりません。これからの課題とし残し、調査を続けていきたいと思えます。

報告のまとめですが、これまでの観察で見た限り、タンポポ世界に「戦争」はありませんでした。タンポポは共存しています。花が小さく、丈も低いカンサイタンポポが、競合せず自分たちの生活エリアを確保している姿を一般の人間はあまり気づかないと言うのが実態だと思います。尤もその「エリア」が人間の手で狭められているというさみしい現実が一方にあるのも見逃せません。



## 5. アキアカネ活動計画案内

お知らせ

フィールドレポーター主催、

恒例のアキアカネのマーキング調査です。

どなたでも参加できます。子どもさんの夏休みの野外活動としてご家族での参加も大歓迎です。多くの方の参加をお待ちしています。

日時：2019年8月3日（土曜日） 10時15分～15時頃

場所：びわ湖バレイ（大津市木戸の打見山～蓬萊山）

雨天の場合；現地雨の場合は中止。中止の時は当日8時頃に参加申込者に連絡します。

## 4月～6月の活動報告

| 月  | 日      | 内 容           | 参加者 | 主な議題・活動   |
|----|--------|---------------|-----|---|
| 4月 | 6日(土)  | 定例会           | 11名 | ①2019年度調査計画確認<br>②第1回調査、セミ調査に決定、担当者選任                       |
|    | 21日(日) | 定例会           | 9名  | ①セミ調査内容、詳細審議  |
| 5月 | 11日(土) | 定例会           | 11名 | ①夏のセミ調査、調査資料最終調整<br>②FR交流会発表内容と手順確認<br>③FR交流会会場準備と進行の打ち合わせ  |
|    | 18日(土) | フィールドレポーター交流会 | 35名 | ①「橋のなまえ」「オオキンケイギク」「集まれモミジ(カエデ)の仲間」調査報告 ②2019年度「セミ調査」案内 ③懇親会 |
| 6月 | 1日(土)  | 定例会           | 8名  | ①掲示板95号内容決定 ②次回調査テーマ検討<br>③セミ調査発送内容決定 ④アキアカネ調査要領決定          |
|    | 15日(土) | 定例会           | 8名  | ①掲示板95号発送 ②レポーターだより52号発送                                    |

## 2019年度 7月～9月の活動予定

| 日 時 |        |             | 内 容     | 場 所    |
|-----|--------|-------------|---------|--------|
| 7月  | 6日(土)  | 13:15～15:45 | 定例会     | 交流室    |
|     | 20日(土) | 13:15～15:45 | 定例会     | 交流室    |
| 8月  | 3日(土)  | 10:30～15:00 | アキアカネ調査 | びわ湖バレイ |
|     | 17日(土) | 13:15～15:45 | 定例会     | 交流室    |
| 9月  | 7日(土)  | 13:15～15:45 | 定例会     | 交流室    |
|     | 21日(土) | 13:15～15:45 | 定例会     | 交流室    |

定例会は原則として第1、第3土曜日の13:15～15:45に琵琶湖博物館の交流室で行なっています。どなたでも参加できますので、どうぞお気軽にお越しください。見学も大歓迎です。なお、予定が変更になる場合があります。詳細は、下記の電話・メールで、琵琶湖博物館フィールドレポーター係までお問い合わせください。

### 編集後記

毎年、年度初めは大変です。前年度の活動報告がまとまります。新年度の活動始めの交流会開催はスタッフ全員が神経を注ぎました。その交流会も終わりました。内容は本号記載のとおりです。成功であったと思います。

さて、今年度第1回テーマは「セミの調査」に決まりました。今年も暑くなると天気予報は言っています。早く鳴き出すかもしれません。調査案内がすぐ届きますので準備宜しく願います。素晴らしい調査報告が沢山届くのをお待ちしています。(中野)



滋賀県立  
琵琶湖博物館  
交流センター  
〒525-0001 草津市下物1091  
TEL 077-568-4611(1F) FAX 077-568-4650  
Email: freporter@biwahaku.jp